きれぎれの追憶

神西清

青空文庫

辻野久憲君が亡くなつたのは一九三七年の九月九日である。早いものだ、それからもう十二年になる。

忘れえぬ友といへば、僕の生涯にもはやかなりの数にのぼる。なかでも年少の友の死は一しほ痛々しい。けれどその死者の記憶が、いつまでも鮮らしい傷口を開いてゐるやうな場合は、かならずしも多くはない。辻野君の死が、僕にとつてその稀な場あひの一つだつた。いやそればかりか、傷口は年々謎めいた口をひろげるのである。

これはどうしたわけだらうか。いま追憶の筆をとらうとして、つき当るのはやはりこの疑問である。だが分らない。謎は深まるばかりなのである。

――亡くなつた辻野久憲は燃える熔岩のやうに美しい存在であつた。その夭折の痛ましさに、私は未だに追憶の筆も執れずにゐるほどである。彼はあるとき、作品にあらはれる自然描写は、いや応なしにその作家の神に対する位置を露はにすると語つたことがある。これは怖ろしいほど鮮明な言葉である。自然を天と地とに引き裂かずには措かない或るきびしさにみちた言葉である。……

そんなことを、彼が亡くなつた年の末ごろ、僕はやつと手帳に書きつけた。そこで何かしら筆が逡巡したらしく、二三行ほどぎざぎざな消しがあつて、その先にはこんな文句が続いてゐる。

――辻野久憲は臨終ちかくカトリックに改宗してゐるが、彼の死を早めたものは或ひはこの言葉の呪ひではなかつたらうかと私は思つてゐる。彼がこの言葉を口にしたのは、Hans Landの短篇『冬の王』について語りながらであつた。あの不気味な作品の魅力を解する人は少なからずゐる。だが彼ほどに熱つぽい傾倒をあの小説に示した人を、私は絶えて見たことがない。蒼白い頬をほんのり紅潮させて、口ごもり口ごもり印象を語りつづけた或る午後の彼の眼の光を私は忘れない。それは紛れもなく、「荊の輪飾をした額ぶち」を魂のどこかに掛けてゐる人の眼であつた。かと云つて私は、この若き反逆児の魂の閲歴については殆ど何も知らないのだが。……

ここで僕の古い手帳の文句は絶えてゐる。この点々の先へ、僕はどんな言葉をつづけたらいいのだらうか。何も知らないのだ……おそらくそれの無限の繰返しなのではないのか。謎は深まるばかりだ。僕にとつて、彼は興奮を抑えながら「口ごもり口ごもり」いつまでも語りつづけるところの、永遠の現在なのかも知れない。

僕が辻野君と親しく交はりだしたのは、たしか一九三五年の春ごろ、辻野君が逗子へ移つて来てからのことだつた。最後に会つたのは、亡くなる年の夏、大森の女子医専の病院の一室に彼の病床を訪ねた時である。そこが彼の死の床になつた。ふだんから嗄れぎみで低かつた彼の声は、一そう嗄れて杜絶えがちで、ほとんど会話の体をなさなかつた。僕も言葉につまつて、蠅の唸りを聞いてゐた。ただ彼の眼だけが、相変らず挑むやうに燃えてゐた。その光を僕は忘

れない。彼は又しても僕にとつて、永遠に燃えつづける現在なのである。金の十字架のやうに！……

さう書いて僕は愕然とする。ではこれが謎の本体であつたのか。謎とは、永遠に燃えつづける今といふことだつたのか。

逗子に暫くゐた辻野君は、やがて七里ヶ浜の姥ヶ谷に移り、それから鎌倉の犬懸ヶ谷の入口に移つて来た。僕の家とはますます近くなつたわけである。この最後の家には、愛人のY子さんもをられた。辻野君のおそらく最後の仕事になつたモオリアックの『イエス伝』の仕上げも、たしかこの家で行なはれたはずである。そのころ長谷の通りのカトリックの会堂に、ジョリイといふ神父がをられた。辻野君はさまざまな疑義をただしに、よくこの神父さんのところへ通つたものである。僕もたしか一度連れられて行つて、辻野君が神父さんと交はす流暢なフランス語の会話を、黙つて聞いてゐた覚えがある。

だが、思へば短かい交渉だつた。犬懸の家には一年もゐずに、辻野君は死んだのである。彼がモオリアックの近作『黒天使のむれ』の読後感を、例の訥々とした口調で熱心に話して聞かせてくれたのも、この最後の時期より以前ではなかつたはずだ。

そんな短かい交際の期間を通じて、一きは鮮やかに僕の目蓋に焼きついてゐる辻野君の姿がある。それは、ある晩春の午さがり、逗子の砂浜でひつそり日向ぼつこをしてゐた後姿なのだ。東郷橋の手前にあつた辻野君の寓居を、たしか初めて訪ねた時だつたと思ふが、留守で玄関に

は錠がおりてゐた。たぶん海岸へ散歩に行かれたのでせうといふ家主の人の言葉に、僕は浜へ出て、はたしてそこに彼の後姿を発見したのである。少し風はあつたが、温かい日ざしだつた。辻野君はやや屈み気味に膝をかかへて坐つて、うつとりと沖合に見入つてゐた。僕はその尖つた肩へ近づいて行きながら、ああここに孤独な人がゐる、と思つた。僕は声をかけた。彼はふり向いた。……

いま僕の机上には、古い『コギト』の一冊がひろげてある。それは辻野君の魂の遍歴の記録である『旅の手帳』の或るページで、「冬の王?」といふ小見出しが出てゐる。「……私はマントにくるまつて、毎日渚に降りていつた。そして汀に蹲り、どんより曇つた沖を、白い波頭を立てて荒れ狂ふ海面を眺めてゐると……」そんな活字が目にうつる。

場面はもはや晩春ではなく、忽然として冬の荒涼に移つてゐるのだ。冬の王?　だがここに附いてゐる?印は一たい何のことだらう。謎は深まるばかりである。……

—12. II. 1949—

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆99　哀」作品社
　1991（平成3）年1月25日第1刷発行
　1996（平成8）年4月25日第6刷発行
底本の親本：「水を聴きつつ」風信社
　1978（昭和53）年8月発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2007年12月12日作成
2012年8月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

きれぎれの追憶

神西清

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/